

北海道教育大学における講演と対話会 2019 報告書

松永一郎



1. 日時

令和1年6月25日(火) 14:40～19:30

2. 場所

北海道教育大学函館校(函館市八幡町1-2) 責任者: 国際地域学科 中村秀夫教授

3. 参加者

講演・学生: 理系(国際地域: 地域環境) 及び文系(国際地域: 国際協同または地域政策) B1～B4 合計 約80名

対話会・学生: 19名

シニア: SNW 大野 崇、若杉和彦、松永一郎(世話役)

SNW東北 矢野歳和

4. 講演: 大野 崇(元三菱重工、元NUPEC, 元原子力安全委員会)

演題: 日本のエネルギーの現状と課題

—日本のエネルギー政策(第5次エネルギー基本計画)—

5. 対話

学生: 19名(B1…3名 B3…7名 B4…9名) グループ数: 2

テーマ: 日本の今後のエネルギー政策について

6. スケジュール

- | | |
|-------------|----------------------|
| 14:40～14:45 | 開会の挨拶(中村教授) |
| 14:45～16:00 | 講演(大野 崇)、質疑応答 |
| 16:15～18:10 | 2グループに分かれて対話会 |
| 18:10～18:15 | 発表 |
| 18:15～18:20 | 講評(矢野和歳)、閉会の挨拶(若杉和彦) |
| 18:30～19:30 | 懇親会 |

7. 報告概要

今回の講演と対話会は中村教授の授業「環境と放射線」の一環として行われたもので、取得単位に含まれる。第1部として講演が多数の学生を対象に実施され、第2部として講演聴講者の中から対話参加者希望者が募られた。

(1) 講演

大野 崇シニアから「日本のエネルギーの現状と課題ー日本のエネルギー政策（第5次エネルギー基本計画）ー」と題して、約1時間行われた。講演は日本のエネルギーの現状と課題を包括的にとらえられるような内容であり、「我が国のエネルギー政策」「再生可能エネルギー」「原子力」「北海道胆東東部地震に伴う北海道大停電」についてまとめられているが、時間の関係から、主として「我が国のエネルギー政策」と「北海道大停電」について説明がなされた。

(2) 対話

Aグループ（学生9名、シニア：若杉、矢野）、Bグループ（学生10名、シニア：松永、大野）に分かれ、「日本の今後のエネルギー政策について」をテーマにして、シニア1名がファシリテーターになり、講演に関する話題、それ以外の話題（放射線教育、地層処分など）について話し合われた。

①Aグループ 若杉和彦、矢野歳和

学生 B3…4名 B4…5名

「原発の必要性」「再エネの活用」「他の電源との比較」「放射線教育」「大間原発」などについて対話した。

②Bグループ 松永一郎、大野崇

学生 B1…3名 B3…3名 B4…4名

「放射線教育」「放射性廃棄物処理・処分」「核融合炉と高速増殖炉」「原子力の伝え方」などについて対話した。

(3) 講評（矢野歳和）

Aグループは原子力発電所の必要性を主題にし、その中で学生から話したい項目として再生可能エネルギー、放射線教育、地層処分についても話題を広げた。原子力発電を廃止すればどうなるか、エネルギー安全保障、経済性、温室効果ガス削減から原子力の重要性を学生は良く認識している。反対者は代案を出せと明言したことは手きびしいが正当な判断である。また再生可能エネルギーの消費者負担が問題であること、原子力の推進には地層処分を同時に進める必要があることなど、学生の皆さんの認識はたいへん合理的で冷静に判断できていることに感心した。

Bグループは放射線を主題にし、このテーマの中で放射線教育はどうしたら良いか、核融合発電の現状と未来、地層処分の現状と将来について話合われた。放射線は特別なものではないこと、教える立場の人が正しい知識を持つこと、子供たちが自分で考えることが重要など、教育者としての心構えを自覚していることがたいへん好ましい。

対話会では両グループで原子力と放射線が主題になった。その中で教員になったら放射線を定量的に正しく評価できるように、風評被害が起きないように教えたい、と多くの学生が共通認識を持っており、そのことを明瞭に表現されていることを頼もしく思い、感動を受けた。

(4) 閉会の挨拶 (若杉和彦)

今日皆さんは毎日スマートフォンを見ている日常とは全く違った体験をしたと思う。まず、2世代も違うシニアや同世代の仲間達と同じ机の前に座って顔を見ながら対話するような機会はなかったと思う。いろいろな人がいて、いろいろな意見があることを学んだと思う。二つ目は、日本のエネルギーや原子力の問題を真剣に議論したこと、これも仲間内ではまず経験しなかったことだと思う。その意味で貴重な体験をしたと思う。特にエネルギーや原子力問題は大変大切な課題であるが理解するのは難しい。今までの歴史や社会の仕組み、世界の動き等も総合的に理解しないとなかなか分らない。

皆さんは1, 2年すると卒業して社会に出るが、是非知識をもっと吸収してバランスある判断が出来るようになってほしい。将来は我々シニアではなく、君たちが決めることになる。責任は重い。今日は中村先生はじめ関係者到大変お世話になった。

我々シニアは皆さんから若いエネルギーをもらうことができた。ありがとうございました。

8. シニアの感想

(若杉和彦)

広い教室で1時間を超える講演と、場所を変えて1時間半の対話と、さらに食事をしながら約1時間の懇親会と、休み時間を入れて合計4時間を超える対話会となった。中村先生には会場の設定から食事の世話まで大変お世話になり、心から感謝申し上げたい。

講演の際は後列から参加学生の様子を観察していたが、居眠りする学生はほとんどなく、皆さん熱心に聴講してメモを取っていた。ただ本来ならQ&Aの時間をとるはずであったが、勇気を出して質問する学生がいなかったことを残念に思う。その後の対話会では、2グループに分かれてそれぞれ顔を見ながら対話したことが良かったと思うが、大変活発な交流ができたと思う。

私はAグループで日本の今後のエネルギー問題についてQ&Aを行った。自己紹介の後、一人ずつ今日聞きたいことを感想とともに話してもらったが、世論は反対しているのになぜ原発が必要なのか、再エネの活用はどうか、他の電源との利害得失はどうか、小中学校で放射線教育が充実してないがどうすべきか、大間原発と安全対策はどうか等々、大変核心をついた質問が出され、それぞれについて議論することができた。

最後の学生の発表では、Bグループでは放射線問題を中心に、Aグループでは原発の必要性を中心にそれぞれ簡潔にまとめた報告が行われた。特にAグループの発表者は、自ら進んで発表を引き受け、ほぼ正確にグループ内議論の内容を理解しており、発表の態度も優秀であった。最後の懇親会でも中村先生と学生の間の意思疎通が十分図られており、我々シニア

アも対話を楽しむことができた。

(矢野歳和)

最初に大野さんが約1時間半の基調講演を行った。テーマは「日本のエネルギーの現状と課題」でエネルギーの必要性和日本の現状について述べ、日本のエネルギー政策や昨年の北海道ブラックアウトについても言及した。学生達は特に環境、安全保障、経済性から原子力の重要性を認識したと思われる。

その後、学生との対話会に臨んだ。対話会は2グループで行い、シニアが各2名ずつ参加した。学生の多くは教員志望だが、自分たちが小中学校で放射線の教育を受けなかったことに違和感を持っており、教職に就いたときには放射線を定量的に教えたいと述べ、原子力の利点も多角的な判断ができるようにしたいとの意識を明確に持っている。これは御指導の教育大学の先生が幅広い視野をお持ちで、学生たちを大間、泊の原子力発電所や幌延の地層処分研究施設に見学に行くなど、学生の教育指導を積極的に行ってきた賜物だと好感を持った。

特に、函館市の青森下北大間の原発への訴訟は、気がついたら一部の人が出しているだけで、一般市民の反対の声はほとんどありませんとのこと。このことは、我々がマスコミの報道に不信感を持ちながらも、結局はマスコミが大々的に報道することによって、函館の反対運動が大きいと思い込んでしまい、結局はマスコミに踊らされおり、現地の生の声を丁寧に聞き入る必要があると大いに反省した。

(松永一郎)

今回の講演・対話会は中村先生の「環境と放射線」の授業の一環として行われた。講演は1年生から4年生までの理系と文系の学生約80名を対象に大野氏の「日本のエネルギーの現状と課題」と題して、約1時間行われた。日本のエネルギー事情を包括的に知るために、非常にわかりやすい講演だったこと、昨年の全道ブラックアウトが生々しい経験として残っていたせいか、全員非常に熱心に聴講していたのには感心した。

その後に行われた対話会は当初、参加者が10名だったのが次第に増えて、最終的に19名となった。中村先生が参加することを勧めたことがあったのだろうが、学生たちも積極的に参加を希望したとのこと、特に3、4年生が主体になっているところに、1年生が3人も一度に参加してきたことは、シニアとしても望外のことであった。

Bグループの学生は10名(4年—4人, 3年—3人, 1年—3人)であった。まず簡単な自己紹介の後に各人より聞きたいことを話してもらい、松永(ファシリテータ)がポストイットに書き出し、それらを次の4つ「放射線教育について」「放射性廃棄物処理・処分について」「核融合炉と高速増殖炉について」「原子力の伝え方(マスコミ)」に分類して対話した。いずれのテーマも前段の講演の資料には含まれていなかったために、口頭や場合によりA4用紙に分かりやすく書いて説明した。予備知識があまりない学生さんたちだったのでどこまで理解できたか分からないが、このような対話会に出るのは初めてだったので、対話の面白さは十分に感じ取ってもらえたと思う。対話後のグループ別発表はA,Bグループと

もに簡潔に、要領よくまとめられていた。

対話の後の懇親会是对話会場をすぐに会場に変えて行われた。中村先生のお手製のおでん、炊き込みご飯も出され、和気あいあいとしたものであった。学生寮が近くにあり、年に何回かは先生を交えて同じような懇親会を持っておられるとのこと。先生と学生さんたちの日ごろのあたたかい心の通じ合いが感じられるものであった。

(大野 崇)

初めて北海道教育大学の対話会に参加し、文系一般参加者を含む 80 名の学生さん相手の基調講演（日本のエネルギーの実情と課題）と対話を担当いたしました。両者とも今回企画頂いた中村秀夫先生の授業の一環として実施され、北海道教育大学のモットーである「人が人を育てる」教育を実感いたしました。

先生のお人柄もあり、講演は 1 時間という長時間にもかかわらず皆居眠りもせず熱心に聞いてくれました。また、中村先生の地域環境科学の講座を受講している 1 から 4 年生との対話も普段感じている疑問をぶつけてくれ対話がかみ合いました。特に、中等学校の教員になることを前提に「放射線教育で何がポイントか」という質問は、悩みの本質をつくもので印象的でした。学部学生で、専門的知識は不十分ですがかえって対話の意義を感じさせるものでした。

なお、懇親会では先生自ら作ったおでんを囲むという日頃の先生と生徒との関係を目の当たりにして少しでも先生のお役に立ったのではないかと実感し、来年以降も継続を約してくれました。